

OH
呉

KEE
起

HOON
燾

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文第120号
学位授与年月日	平成13年11月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	『平家物語』の研究
論文審査委員	(主査) 教授 仁平道明 教授 佐藤伸宏 教授 佐藤弘夫

論文内容の要旨

序章 研究の目的と方法及び研究史概観

第一節「研究の目的と方法」では、どのような問題意識に立ち、どのような方法で研究を行ったのかということについて述べた。

これまで多くの先学によって『平家物語』の特質や性格・思想等が研究されてきたが、その多くは覚一本を中心とするものであった。しかしながら、『平家物語』の諸本の中には、たとえば『源平盛衰記』のように章立てでも大きく異なり内容面でも多くの異なる点をもった、異本ともいべきものがある。また『源平盛衰記』ほどの違いではないものの、たとえば読み本系の延慶本と語り本系の覚一本との間には、無視しがたい違いが認められる。そしてそれは『平家物語』が語ろうとする世界の枠組みや方向性にまで関わってくるものである。覚一本によって『平家物語』を代表させてその世界を語る事が問題であることは明らかであろう。様々な系統の本にはそれぞれ独自の方向性があり、それを押さえながら生成・展開していくものとして『平家物語』の世界は考えられなければならないだろう。

本論文の目的は、原理的に遡源が困難な『平家物語』の祖本一「原平家」というものの復元ではなく、諸本各々が示している物語の性格とその志向する方向を明らかにすることにあるが、そのためには諸本間における記事の異同や登場人物の描かれ方の違い、本文の表現の違い等を分析する必要がある。

『平家物語』諸本の比較分析は、山田孝雄、高橋貞一氏の諸本分類を嚆矢とする、語り本系と読み本系という分類をもって行った。語りと読みものという、生成過程の特質から分類された両系統は内容の上でも各々違う傾向と特質をもっているからである。

第二節「研究史概観」では、『平家物語』の主題をめぐる先学の研究成果と諸本分類の研究史について整理した。1. 「『平家物語』の主題」では、主に覚一本の本文内容に依拠して論じられきた『平家物語』の主題に関する先学の諸見解について考えてみた。因果応報、無常といった仏教の観念、また人間の力では及ぼすことのできない運命という意識が物語の中で如何に溶き込まれていたか、ということに重点をおいて考えた。そうすることによって『平家物語』が示そうとした世界が如何なるものであるかが見えてくるからである。2. 「『平家物語』の諸本とその生成」では、諸本分類に関する研究史と現存諸本が様々な形態に至るまでの過程について考えた。本論文は『平家物語』の諸本系統論を論じようとするのではなく、語り本系と読み本系各々に内在している性格と特質の究明がその目的である。しかし、先も言及したように、語り本系と読み本系とは生成過程の特性から分類されたものであって、その内容の違いから分けられたのではない。よって、語り本系、読み本系という区分に定着するまでの諸本分類の過程を押さえた上で、この二つの系統分類が本論文において如何なる意味を持つかについて述べた。

第一章 『平家物語』における清盛の位置付け

第一節「「盛者」清盛の紹介」では、物語の冒頭ともいえるべき「祇園精舎」で清盛はどのように位置付けられ造型されているかを異朝本朝の反逆者等の紹介と比較しながら考えた。

「祇園精舎」では、異朝本朝の反逆者と並べて清盛が紹介されていて、おのおのの王朝に逆らったその反逆者等と同類のものとしての清盛が位置付けられているのである。ただ、語り本系と読み本系との間には、清盛の紹介の前に語られる異朝本朝の反逆者等についての記述に異同が見られ、語り本系と比べて読み本系のほうが一層つよく異朝本朝の彼らを批難し、その後清盛を紹介しており、結果的に語り本系に比べて読み本系のほうが清盛に対してよりつよく批難していることが確認された。この「祇園精舎」に記されている異朝と本朝の反逆者と言っても、史実上王莽のような王位篡奪者もいれば、王位篡奪まではいかずに王朝社会の秩序を乱したものもいる。そして、語り本系は、その両朝の人物に対する批難の度合も読み本系とは違う傾向を見せている。すなわち、語り本系諸本は異朝の人物等に向かう批難度と比べて本朝の人物等に対しては一段批難度を低めた表現が行われている。しかし、読み本系の中でも特に延慶本、長門本の場合は本朝の人物等に対しても異朝のものとはほぼ対等な批難されるべき対象として位置づけられていることが確認された。清盛を王朝社会を乱した反逆者程度ではなく、王位篡奪を企む人物として造型しようとする読み本系の意志が窺われるのである。同系統の四部本、盛衰記では語り本系と同様な記述がなされているから、それが読み本系全ての傾向とは言い難いが、少なくとも清盛を王位篡奪者として語ろうとする、傾向が延慶本等には認められるのである。

第二節「平清盛に対する諸本の呼称」では、清盛に対する呼称からどのようなことが見られてくるのか、という点について考えた。

語り本系と読み本系との間における清盛造型の違いは彼に対する呼称にも反映されているのではないと思われる。冒頭の部分からもすでに見えている、両系統間における清盛の呼称の違いは、清盛造型とかかわって系統各々の違う志向性の反映として考えることが可能であろう。そこで、1 「覚一本の「清盛公」用例と諸本との比較」では、覚一本と延慶本、おのおのに記されている清盛の呼称を比較分析した。太政大臣の地位まで上った清盛に対して「清盛公」

という呼称が付けられるのは当然のことでもあろうが、それが覚一本の場合には十カ所も見られるのに対して、延慶本には一カ所しか見られない。延慶本にも「大政大臣」「大政入道」のような地位上の尊称は多く見られるが、「公」のような尊敬の意を示す呼称とは性格が違っているのであろう。また、2「平清盛と他の平氏との呼称比較」では、覚一本と延慶本とに記されている、他の平氏に対する呼称と清盛に対する呼称とが如何になっているかを比較調査して、そこから見られてくる物語の意味を考えた。「公」という呼称は大臣以上の地位の者に付けられるのが普通であって、その地位まで上った重盛と宗盛にも「公」が付くのは当然とも言える。よって、覚一本には「重盛公」が一カ所、「宗盛公」が三カ所あり、延慶本には「重盛公」が四カ所、「宗盛公」が五カ所ある。ここで問題になるのは、先も確認したように延慶本における「清盛公」が一カ所しかないのに「重盛公」と「宗盛公」がもっと多く記されていることである。地位の面でも位相の面でも重盛、宗盛よりは清盛の方に「公」がもっと多く付けられるのが当然なことであろう。すなわち、これは清盛に対する延慶本の意識が反映された結果によるものではなかろうか。

第二章 朝廷に対する清盛の姿勢

第二章では、朝廷に対する清盛の姿勢が如何に認識され、造型されたかを、諸本の本文異同を通して考察した。冒頭で予告されたように、語り本系と読み本系との間には朝廷に対する清盛の態度、姿勢を示唆する記述に明確な違いがあることが確認された。

第一節「清盛の遺言」では、清盛の遺言をめぐる諸本の記事の異同を通して、両系統間の清盛造型に対する違う傾向を考察した。

清盛は遺言で、これまで自分が討ち滅ぼしてきた対象が、語り本系では朝廷に背いた朝敵だったとするのに対して、読み本系では自分に反逆した者ともだったと語っているのが確認された。すなわち、語り本系には自分自身が朝廷の秩序のなかに存在していると語る清盛、それに対して読み本系には朝廷の上に君臨し支配すべき自分自身を語る清盛がおのおの描かれているのである。明らかに清盛造型に対する両系統の志向の違いが生み出した結果であろう。

第二節「後白河院に対する清盛の姿勢」では、平家一門の討滅をはかった鹿谷陰謀事件と関連して展開される清盛の行為の中、特に後白河院に対する清盛の処置は如何なる意味をもつかに重点をおいて考えた。

鹿谷陰謀に関与した後白河院を幽閉する清盛の行為は、確かに人臣の身としては道理に外れたことであろうが、清盛にとっては自己防衛的な意味を持つ。しかし、読み本系の四部本では鹿谷陰謀に院の関与が記されてもいないし、院が幽閉されることもなかった。しかし、治承三年の政変の際、他の諸本と同様、四部本にも院の幽閉が記されているが、この幽閉は鹿谷陰謀事件に連なる性格であることを考えれば、この四部本における院の幽閉は享受側にもはや清盛の自己防衛という理解を求めることは難しいだろう。

第三節「治承三年の政変と清盛像」では、治承三年の清盛のクーデターとも言うべき政変の際の清盛の言動が、如何なる清盛造型の意図によるものであるかについて考えてみた。

嫡子重盛の死後、朝廷に不満をもっていた清盛は、後白河院の幽閉、公卿四十余人の解任を実行する。これについて語り本系も読み本系も批難をしている中、特に読み本系では、保元の乱の際、王位争いで敗れた崇徳院の面影を清盛に見出している。つまり、清盛を王位篡奪者のような人物として描こうとする傾向を見せているのであろう。

第四節「遷都をめぐる諸本の異同」では、人々の愁いも憚ることなく、福原に新都を移したりする清盛の行為をめぐる諸本間の批評の違いは、清盛の造型と関連して何を示唆しているかについて考えた。

福原遷都をめぐって、語り本系では批難と共に遷都の理由を記して、清盛の行動を理解させるような表現がなされているが、読み本系ではひたすら批難性の批評しか記されていない。これは言うまでもなく、清盛造型に対する両系統間の志向の違いから発したものであろう。

第五節「清盛と義仲」では、清盛とともに朝廷に対する無法者として挙げられる人物義仲と清盛とを比較し、朝廷に対する姿勢と関連して、両者がどのように評価されているかについて考えた。

平家を都から追い出した義仲は、既存の秩序を無視し型破りの言動を振る舞うことが多かった。このような義仲の姿を清盛と比較する際、語り本系には清盛を賞讃するような表現がなされているが、読み本系にはその賞讃に値する表現がないか、または対等な無法の人物として評価されていることが確認された。

第三章 「禿髪」「厳島御幸」における清盛像造型

第三章では、「禿髪」「厳島御幸」の記事をめぐる諸本間の記述の異同を通して清盛造型について考えてみた。第一節「覚一本における清盛の評価」では、覚一本においてどのように清盛が造型されたを他の諸本と比較しながら考察した。

覚一本では清盛に対して批難性の表現と共に、彼を弁護・擁護するような記述が多く見られる。清盛の評価について、覚一本の全般的な清盛評価を確認した上で、諸本間の比較分析を行った。

第二節「「禿髪」の意味」では、覚一本「禿髪」に記されている記事の内容を他の諸本と比較して、その違いがもつ意味について考えた。「禿髪」には、記事の前半は両系統とも共通に記載されているが、その後半に続く後続譚は語り本系にはなく、読み本系のみが有していることが確認された。その後続譚というのは、清盛を王位篡奪者あるいは王位を脅かす人物として位置づけようとする意図を窺わせる内容である。

第三節「「厳島御幸」における諸本の異同」では、「厳島御幸」における諸本間の記事の異同を通して、諸本おのおのの清盛造型に対する志向性について考察した。

こちらも「禿髪」のように、記事の前半は両系統とも共通に記載されているが、その後半に続く後続譚は語り本系にはなく、読み本系のみが有していることが確認された。読み本系が有する、その後半部にあたる記事では清盛を王位篡奪者としてまでは描いていないが、王位を脅かす人物として造型されている。この記事における「原平家」の姿が不明であることから、現存諸本の記事が拡大されたのか縮小されたのかはわからない。ただ確かなのは、このような記事の異同は両系統間の清盛造型における志向性の違いによってもたらされたということである。

第四章 南都炎上と清盛

第四章では、従来、仏法に対する反逆者としての清盛像を決定的に位置づけることになった南都諸寺の焼き滅ぼし事件をめぐって清盛は如何に造型されているか、という問題をこの出来事が記述されている巻六「奈良炎上」（覚一本の場合）を中心に考察した。

第一節「仏法上の清盛像造型」では、清盛の信仰と関連して仏法上で清盛はどのような人物として造型されているかについて考察した。

南都諸寺の焼き滅ぼしに対する最高責任者である清盛は、その罪のため「無間地獄」に堕ちるしかなかった、というようなことが多くの諸本に記されている。要するに清盛は仏敵だからそのような境遇に処せられるしかなかったということになるが、それがはたして諸本すべての志向することであろうか。清盛の信仰と関連付けながらこの点について考察した。

第二節「南都討滅に至る過程」では、南都討滅に至る過程における諸本間の異なった内容について比較分析した。

語り本系には、南都衆徒の勢力との尖鋭な対立の中で清盛は冷静を保って対応していく姿で描かれている。一方的とも言うべき南都衆徒の乱暴に我慢し耐えていく彼の姿は公的な自覚をもつ為政者としての姿にほかならない。こうした語り本系の傾向とは違って、読み本系のほうには、自分自身に対する衆徒の侮辱に兼康軍を遣わすなど、為政者としての公的な姿勢を保つことなく、私的な感情に動かされる清盛の姿が描かれていた。

第三節「南都炎上の真相」では、南都諸寺の炎上当時の状況を伝える記事の異同を通して、清盛造型に対する各本の意図について考えた。

炎上当時の状況を伝える記事を見ると、放火は偶然の出来事だと伝える語り本系の記述とは違って、読み本系には重衡軍の積極的な行動によるものだという事になっていった。これは清盛の仏敵像と関連して、両系統間の志向の違いから発するものであろう。

第四節「重衡のことば」では、諸本に記されている重衡の言葉を通して、諸本の意図する清盛像を考えた。

生捕りの身となって頼朝と対面する際の重衡の言葉などを見れば、覚一本の場合、清盛を単純に仏敵視するのではなく、ある面では清盛を擁護・弁護しようとする物語の意図まで感じさせられる。こうした語り本系の傾向とは違って、読み本系のほうには、清盛に対する擁護・弁護する性格をもつ重衡の言葉は見えないのが確認された。このような両系統における記述の違いは、仏敵像造型とかかわる各本の清盛造型の方向性の違いから発するものとして考えられた。

第五章 清盛追悼説話群考

第五章では、清盛死後、清盛を追悼する意味を持つと言われている説話群について考えた。巻六「入道死去」（覚一本の場合）に続く記事、いわゆる清盛追悼説話群と言われる説話群が見られるが、語り本系、読み本系を問わず、この説話群は清盛の死去に対して追悼する意味を持たせられると言われるほど、清盛生前の事跡を褒めたてたり美化したりする内容をもって記述されていることが確認される。しかし、この説話群は、諸本間の章立て及び本文内容の異同が激しく、そこには、追悼の差が見られ、はたして追悼という物語意味を認めるべきか否かといった疑問を覚えざるを得ないものもないではない。本章ではこうした説話群をめぐる諸本間の異同に着目して、そこに見出される清盛造型の相違を明らかにするとともに、各諸本における物語的志向の意義の究明を試みた。

第一節「清盛追悼説話群と諸本の構成」では、この説話群と関連する章段の構成が諸本間で異なっている点について考えてみた。

語り本系と読み本系との間における章段の構成配列の違いは、各説話を独立的に立てようと

した語り本系の方針と説話間の関係性を持たせようとする読み本系の方針との違いからもたらされたと思われる。また、それは清盛の権者、皇胤説をもって物語を展開していくのに、両系統おのおのがどのような意図を持っているのかを窺わせる意味をもつ。

第二節「『築嶋』における諸本の異同」では、「築嶋」をめぐる記事の異同を通して清盛像について考えた。

語り本系は清盛の信心の深さと共に、彼の人道的な面が強調されているが、読み本系のほうには清盛の宗教的な面だけが褒められて、人道的な面については言及されていないか、または盛衰記のように、むしろ非人道的な清盛の姿を描き出そうとする傾向も見えた。

第三節「清盛権者説をめぐる」では、清盛が権者であるとする説話をめぐる諸本の記事の異同を通して、両系統各々がこの権者説をもって清盛造型にどのように結びつけたのかについて考えた。

第四節「清盛落胤説をめぐる」では、清盛が白河院の落胤であるとする説話をめぐる諸本の記事の異同を通して考察した。

この二つの説話が、語り本系においては別々の独立した話になっているが、読み本系では緊密に関係されていることが確認され、語り本系に比べて読み本系のほうが一層論理化した粗筋をもって構成されていると判断された。しかし、読み本系の方が語り本系と比較して一層論理化されていたとあって、清盛に対する追悼の意図がよりよく示されていることではない。語り本系はこれらの説話を関係せず別々の独立した形で語っているが、清盛生前の行為を悪行として認識させるような表現を出来るだけ抑えて、彼を仰いだり賞讃したりするところに力を注いでいることが確認された。こうした語り本系の傾向と比較して、読み本系はおのおのの説話を「同種姓」を持ち込んで関係させることによって、より具体的・論理的な粗筋を作り上げている。しかし、この「同種姓」論を取り入れることによって、清盛は善人の白河院に対比される悪人として造り上げられたので、結果的に語り本系に見られるような清盛への追悼の意味はだいぶ薄れてしまうことになった。

結び

このように朝廷に対する姿勢、仏法上の認識、説話など『平家物語』の至るところから、清盛に対する人物造型が語り本系と読み本系との間で違っていることが確認された。そして、その違いは単純に清盛に対する批難の程度の差と言えるような次元のものではなく、両系統間における、清盛に対する認識の違い、造型しようとする志向性の違いから生成された結果であると考えべきだろう。

「原平家」が平曲の台本として造られたものかということについては未だに確かなことはわからないが、『徒然草』二二六段などを根拠として、少なくとも早くから『平家物語』が「語り」の台本として用いられたことはほぼ間違いないようである。とすれば、盲目法師が琵琶を弾きながら、人々に感動を与えるため、因果律にそった内容と共に平家への同情による涙を誘うような語りをしたことは十分推測できよう。要するに、自分の悪行によって一門を滅亡に導く人物としての清盛が語られる一方、悲惨な結末を迎えた同情すべき人物としての清盛が語られ、民衆には清盛への同情と共にその凋落から世の無常さを考えさせたのではないかということである。つまり、『平家物語』の最終的な目的というのが仏道に専念することを願った民衆への唱導であることが認められるなら、この「語り」は世の無常を示して民衆の唱導を試み、

その「語り」の性格を引き継いだのが現存の語り本系ではあるまいか。

読み本系のほうも、勿論、清盛の悪行によって一門が滅ぼされる運命に報いられてしまったといった構想をもって物語を展開していることは言うまでもない。ただ、語り本系と比べて本文内容が違うのは、すでに確認した如く清盛に対して非常に厳しく批難する記述が多いことと、清盛を王位篡奪者または王位を脅かす人物としてまで認識させようとする傾向が著しく表れていることである。それは清盛への同情を募らせる方向ではなく、厳然たる因果の理を知らせて仏道への専念を願う読み本系の意図によった叙述と見るべきであろう。

このように語り本系と読み本系との間には本質上の違いが確認される中、特に清盛造型においては確かな方向性の違いが認められる。言うまでもなく『平家物語』は清盛をなくしては成り立たないことを考えれば、この清盛を各本が如何に描いているかということは、『平家物語』の性格と本質が如何なるものかということを考える上で重要な意味を持つのである。

論文審査結果の要旨

本論文は、『平家物語』諸本の性格とその志向する方向性の違いを明らかにして生成展開する作品としての『平家物語』のあり方を動的に把握することを目指し、『平家物語』の枠組みを規定する存在としての平清盛に関する記事を中心に、覚一本・流布本・屋代本・百二十句本・四都合戦状本・長門本・延慶本、そして異本としての『源平盛衰記』等の諸本間の異同を詳細に分析し、その意味について考察したものである。

全体は、「序章 研究の目的と方法及び研究史概観」、「第一章 『平家物語』における清盛の位置付け」、「第二章 朝廷に対する清盛の姿勢」、「第三章 「禿髪」「巖島御幸」における清盛像造型」、「第四章 南都炎上と清盛」、「第五章 清盛追悼説話群考」の六つの章及び「結び」から成る。

「序章 研究の目的と方法及び研究史概観」「第一節 研究の目的と方法」では、多く覚一本によって『平家物語』の特質や性格・思想等を論じてきた従来の研究の問題点が指摘され、たとえば読み本系の延慶本と語り本系の覚一本との間には無視しがたい違いがあること、そしてそれが『平家物語』が語ろうとする世界の枠組みや方向性に関わるものであることが示される。覚一本に代表させて『平家物語』の世界を語ろうとする従来の多くの研究によっては明らかになしえない、生成展開していくものとしての『平家物語』の十全な把握のためには、多くの諸本における差異を詳細に分析してその意味を考えることが必要であり、特に『平家物語』の枠組みの形成に大きく関わる存在としての平清盛の描かれ方を比較することによって、諸本の特質と志向する方向性を明らかにすべきであるとする論者の方法の設定は、『平家物語』研究上重要な視座を提示したものといえよう。

また「第二節 研究史概観」では、従来重視されてきた『平家物語』における運命観について研究史を整理しながら検討し、一つの主題が作品全体をおおっているとする静的な把握の危険性を指摘し、生成展開する作品群として『平家物語』を位置付けたとき、どのようにその本質を究明すべきかを説き、指標を設定して諸本を精密に比較していく方法の有効性を明らかにする。

そのような観点に立って、まず「第一章 『平家物語』における清盛の位置付け」「第一節

「盛者」清盛の紹介」において、全体の序章としての「祇園精舎」で清盛がどのように位置付けられ造型されているかが考察される。すなわち、「祇園精舎」では、語り本系と読み本系との間に、異朝・本朝の反逆者の記述に違いがあり、後者においては反逆者に対するより強い非難がなされ、それはそのまま清盛に対する非難・批判に結びつくものであり、それが延慶本における王位篡奪者に通じる者としての色彩を加えた清盛像の造型に典型的な形で示される方向性と同一のものであることが明らかにされる。さらに、「第二節 平清盛に対する諸本の呼称」では、語り本系と読み本系における清盛造型の違いがその呼称にも反映していることが示される。たとえば、覚一本においては「清盛公」という敬意を含む呼称が多く見られるのに対して、延慶本などではそれが少なく、敬意の低い呼称が目立ち、そこに清盛像造型の方向性の違いが明らかに示されている、とする。呼称を指標として、語り本系における清盛像造型のあり方の意味と読み本系との方向性の違いを実証的に明らかにする、このような論者の考察の結果は、確実に拠ることのできる成果として高く評価されるべきものであろう。

「第二章 朝廷に対する清盛の姿勢」においては、「第一節 清盛の遺言」で、読み本系における清盛の遺言が自らを朝廷の上に君臨する存在として位置付けているのに対して、読み本系ではあくまでも朝廷・天皇の臣として朝廷の秩序の中で自らを位置付けているという違いがあることが指摘される。また「第二節 後白河院に対する清盛の姿勢」では、他本における清盛の後白河院幽閉が自己防衛的なものとして語られているのに対して、読み本系の四部合戦状本においては、院の幽閉は鹿谷陰謀と関連付けられていず、単に王権を軽んじ朝廷の秩序を覆す反逆者としての清盛の姿が強く印象付けられる、とする。「第三節 治承三年の政変と清盛像」では、読み本系においては崇徳院の怨霊と清盛の中の天魔が結び付けられ、清盛が王位をめぐる争った崇徳院と同じ位相に置かれていることが明らかにされる、とする。また「第四節 遷都をめぐる諸本の異同」では、語り本系においては遷都について非難しながらも遷都の理由を記しているのに対して、読み本系ではひたすら批判・非難されるところに、両系統の志向の違いがあらわれている、とみる。「第五節 清盛と義仲」では、語り本系においては義仲の悪行が王莽になぞらえられているのに対して、読み本系では清盛に代表される平家と比較されているところに、前節で明らかにしたのと同様の傾向が確認される、とする。さまざまなエピソードの検討を通して、同一の方向性を確認していく論者の行論は説得的であり、したがうべき見解であることは疑いを容れない。

「第三章 「禿髪」「巖島御幸」における清盛像造型」では、「禿髪」「巖島御幸」後半部に続く、清盛を王権を脅かす人物として語る譚が語り本系にはなく読み本系だけに見られるものであり、そこに、語り本系における、読み本系と異なる清盛像造型の方向性が看取される、とする見解が示されている。

「第四章 南都炎上と清盛」では、従来、仏法に対する反逆者として清盛を決定的に位置付け、「清盛の悪行応報による平家の没落滅亡」という全体の構図の前提をほぼ完成するものとして語られているとされる「奈良炎上」、及びそれと関連する仏法と対立し逆らう者としての清盛を語る話を、諸本を比較して精密に分析している。論者は「人道死去」における、源氏を打倒するまで死後の供養を拒む清盛の遺言にしたがって仏事供養を行わなかったと語る読み本系の記事が、語り本系には見えないことを指摘し、そこに一門の凋落につながる清盛の罪悪に転化する論理を見いだす。また南都討滅に至る過程を諸本に追い、語り本系が、一方的とも言える南都の衆徒の乱暴に耐えていく清盛の姿を描いているのに対して、読み本系では、朝廷ではな

く自分に対する侮辱として南都の行為を受けとめ、私的な感情から兵を動かして南都を討滅する清盛像が描かれていることを確認し、そこに仏敵としての清盛像のより明確な造型の志向をみる。

「第五章 清盛追悼説話群考」では、清盛死後、清盛を追悼する意味を持つとされる説話群について考察し、覚一本によってみると清盛生前の事跡を褒め美化しているようにも見えるそれらが、諸本間の異同がはなはだしく、章段の構成の違い、記事の異同を検討してみると、語り本系が清盛の信心深さと共にその人道的な面を強調しているのに対して、読み本系では人道的な面についての言及が行われず、むしろ非人道的な姿を描こうとする志向がみてとれることを指摘する。また清盛が権者であるという説話、後白河胤の落胤説話の検討を通して、そのような説に否定的な説が語られる延慶本の記述を引き、その清盛否定の方向性を差し示し、読み本系を代表する延慶本のあり方を明らかにする。

以上、本論文は、『平家物語』の諸本を詳細・精密に比較検討し、それらの志向・方向性の違いとその特質を明らかにし、生成展開する作品としての『平家物語』のあり方の諸相を動的に提示しえたといえるものである。諸本の成立とその関係等についてはいまだ検討すべき部分を残してはいるが、清盛像の造型を主な指標として『平家物語』諸本の違いと特質、志向する方向性の違いを実証的に明らかにした本論文の成果は、『平家物語』研究に新しい展望をひらいたものとして高く評価されるものであり、斯学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。